

ウェブ、再教育、未来を灯す教育の土台作り

オトニスフエルニピュルテ
(Haur Sphere Pureté)

まえがきにかえて

ウェブによって、教育は再教育される。一度目は、緒方洪庵の適々齋塾、吉田松陰の松下村塾、江戸の寺子屋といった「相互的な教育」から、戦後の「制度」による教育になった。ぼくたちひとり世代は、優等生であれば優等生であるほど、その影響をモロに受けてきた。そして、これからの時代が二度目である。つまり、教育の再教育である。

それは、現代のリベラルアーツである。諸大学が「リベラルアーツ学部(教養学部)」のように、天文・音楽・哲学といった古代リベラルアーツの

名残を撫でるのではなく、もっと本質を尊重した教育である。平等で、自由で、カオスで、多チャネル的で、遊び心に包まれていて、自分の目的に合目的で、規制・束縛されず、あらゆる可能性を追求できる土壌を作り出す教育。教育は再び教育されるのである。

教育の再教育が必要である。なぜならば、ぼくたちは優秀なアルゴリズムを開発しなくてはならないからである。ぼくたちは問題の多い時代に生まれてきた。20世紀の人々がツケとして残して

くれた問題たちが、分厚い問題集(解答・解説ページなし)となって丸々ハンドフル状態にある。一筋縄ではいかないようなA問題が、複雑に絡み合っているB問題が、急な勾配のあるC問題が豊富にそろいもそろっている。手ごわい問題集である。どんなアルゴリズムを打ち出すか。突きつけられている難題は、息の長い思考を強要してくる。多くの重要な問題を解決できる人材は、必修授業のフル単位で満足するような人ではない。「make the world better」というグローバルな発想で、ローカルに問題を解いていく人である。

ところで、優秀なアルゴリズムを開発すると、どうして解決するべき複雑な問題が解決できるのか。

見坊豪紀先生は、143万枚の単語カードを集めた。これを辞書にまとめたのが言わずと知れた『三省堂国語辞典』である。もちろん使わなかったカードもあるが、全部使ったと考えると見出し語が143万語あるとしよう。この分厚い辞書から

ある単語を探す。何の策もない場合、全部で143万回の行為が必要である。小学校で習った「辞書の引き方」^①というアルゴリズムを使うと、20回(※ $\log_2(134000)$)の行為のうちにお目当ての単語にあたることができる。単純計算で143万回が、20回になる。大爆笑である。優秀なアルゴリズムは、「優秀な工夫」とわかりやすく言ってもいい。だれも思いつかなかった工夫を思いつく、創造する、革新する、そのために現代のリベラルアーツが必要である。そのためにウェブによる教育の再教育が必要なのである。

……………

①

辞書の真ん中を開いて、そのページより前なら前半分、後ろなら後半分にしぼる。この時点で二分される。さらに、樹形図は広がっていく。二分は続く。残りのページの真ん中を開いて、それよりも前なら……後ろなら……を繰り返していく。回数は、辞書に載っている単語がN個の場合、 $\log_2 N$ となる。

続々、PROJECT:AMNIS VOL.1 本誌にてお楽し

みください。